

← 第58回
豊崎由美アワー

読んでいいとも！ ガイブンの輪 →
(年末特別企画)

「オレたち外文リーガーの
自信の一球と来年の隠し球」Vol.8 →

← 2019年12月21日(土)
青山ブックセンター本店
大教室

よんともゲスト一覧 (2009年第1回～第64回)

1 野崎敏さん	28 山内マリコさん	品社、松籟社、河出書房新社、藤原編集室]
2 川上弘美さん	29 山崎まどかさん	48 中川五郎さん
3 岸本佐知子さん	30 [特別編：河出書房新社、国書刊行会、白水社、早川書房、作品社、群像社]	49 今福龍太さん
4 榎本俊二さん	31 伊藤聡さん	50 [特別編：藤原義也さん(藤原編集室) + 西崎憲さん]
5 本谷有希子さん	※本来は山崎さん→松田さん→伊藤さん、の順でご紹介。	51 茅野裕城子さん
6 [特別編：柴田元幸さん + 若島正さん]	32 松田青子さん	52 [特別編：国書刊行会、白水社、河出書房新社、早川書房、藤原編集室、未知谷、水声社、東京創元社]
7 宮沢章夫さん	33 野谷文昭さん	53 都築響一さん
8 前田司郎さん	34 阿部賢一さん	54 朝吹真理子さん
9 [特別編：大森望さん + 岸本佐知子さん]	35 小沼純一さん	55 鈴木杏さん
10 石川直樹さん	36 [特別編：国書刊行会、白水社、早川書房、群像社、作品社、松籟社、河出書房新社]	56 ケラリーノ・サンドロヴィッチさん
11 鴻巣友季子さん	37 中島京子さん	57 [特別編：新潮社、クオン、藤原編集室、集英社、国書刊行会、白水社、河出書房新社、早川書房]
12 [特別編：群像社、水声社、未知谷]	38 星野智幸さん	58 小橋めぐみさん
13 片岡義男さん	39 西崎憲さん	59 福岡伸一さん
14 小池昌代さん	40 [特別編：天野健太郎さん、飯塚容さん、吉川風さん、三浦順子さん]	60 柴田元幸さん
15 青柳いづみこさん	41 米光一成さん	61 [特別編：野谷文昭さん、斎藤文子さん、柳原孝敦さん、久野量一さん]
16 古屋美登里さん	42 [特別編：河出書房新社、群像社、国書刊行会、作品社、松籟社、白水社、早川書房、藤原編集室]	62 木原善彦さん
17 影山徹さん	43 金原瑞人さん	63 [特別編：新潮社、クオン、水声社、藤原編集室、集英社、国書刊行会、白水社、河出書房新社、早川書房]
18 [特別編：いしいしんじさん]	44 酒寄進一さん	64 柴崎友香さん
19 坂川栄治さん	45 橋爪功さん	
20 藤田新策さん	46 石倉三郎さん	
21 滝本誠さん	47 [特別編：国書刊行会、白水社、早川書房、群像社、作	
22 風間賢二さん		
23 高山宏さん		
24 [特別編：作品社、水声社、国書刊行会、白水社、早川書房、河出書房新社]		
25 安藤礼二さん		
26 佐々木中さん		
27 海猫沢めろんさん		

目次

河出書房新社 島田和俊

5

クオン 金承福

10

国書刊行会 樽本周馬

14

集英社 佐藤香

17

新潮社 須貝利恵子

20

水声社 廣瀬寛

23

白水社 藤波健

28

早川書房 山口晶

36

藤原編集室 藤原義也

41

河出書房新社

👑 今年のイチオシ

ジョージ・ソーンダーズ『十二月の十日』（岸本佐知子訳）

中世テーマパークで働く若者、賞金で奇妙な庭の装飾を買う父親、薬物実験のモルモット……ダメ人間たちの何気ない日常を笑いとSF的想像力で描く最重要アメリカ作家のベストセラー短篇集。

ガブリエル・ガルシア＝マルケス『純真なエレンディラと邪悪な祖母の信じがたくも痛ましい物語 ガルシア＝マルケス中短篇傑作選』（野谷文昭訳）

14歳の少女の途方もない受難を神話的レベルにまで昇華させた表題作のほか、「大佐に手紙は来ない」「この世で一番美しい水死者」など10篇を精選。世界文学の最高峰を瑞々しい新訳で。

『完全版 韓国・フェミニズム・日本』（斎藤真理子＝責任編集）

創刊以来86年ぶりに3刷となった「文藝」2019年秋季号特集「韓国・フェミニズム・日本」が、大增補のうえ遂に単行本化！ 日韓の書き手が描き出す韓国文学とフェミニズムのいま。

👑 来年の隠し球（タイトルはすべて仮題）

『文藝 2020年春季号』（1月7日発売）

【特集 中国・SF・革命】ケン・リュウ、閻連科、佐藤究、王谷晶、上田岳弘、イーユン・リー 他〈対談〉閻連科×平野啓一郎〈エッセイ〉藤井大洋、黒色中国、立原透耶

【創作】最果タヒ「猫はちゃんと透き通る」／山下紘加「クロス」などなど

【特別対談】エトガル・ケレット×西加奈子ほか

アーシュラ・K・ル＝グウィン『暇なんかないわ 大切なことを考えるのに忙しくて ル＝グウィンのエッセイ』（谷垣暁美訳）

80歳を過ぎて思うこと、SFやファンタジー、世の中のおかしなこと、生の

河出書房新社

喜びから愛猫パードまで、2018年に亡くなった著者の自由闊達な思考の数々。2010年代にブログに綴ったエッセイを精選。

デイヴィッド・フォスター・ウォレス『フェデラーの一瞬』（阿部重夫訳）
宿敵ナダルとの伝説的な死闘を分析しつつ、テニスの本質を体現するフェデラーの魅力を精緻に綴った名エッセイのほか5篇を収録。大傑作『無限の道化』著者による極私的テニスエッセイ集。

ユーディット・シャランスキー『失われたいくつかの物の目録』（細井直子訳）
解体された東ドイツの宮殿、絶滅種のトラ、太平洋に沈んだ島、年老いたグレンタ・ガルボ……。失われた自然や芸術作品が雄弁に語り始める。各章16ページのテキストとダークな線画で構成。

ティムール・ヴェルメシュ『空腹の人々と満腹の人々』（上下）（森内薫訳）
『帰ってきたヒトラー』の著者ヴェルメシュがついに第2作を発表！ 世界に共通する現代ドイツの格差や移民や難民の問題を過激なジョークとユーモアで辛辣に風刺した小説。不道德、リアル、滑稽、悲劇……前作を超える破壊力満天のパワーが期待できる大作。嘲笑と自嘲を武器にヴェルメシュが帰ってきた。

閻連科『日熄』（泉京鹿訳）

ある日突然太陽が死に絶え、夢遊病に取り憑かれた人々が街にあふれだす。欲望をさらけだし、盗み、奪い、殴りあい、殺人を犯す。生も死も管理される現代中国の心を描く別次元の傑作。

イーユン・リー『理由のない場所』（篠森ゆりこ訳）

自殺して間もない16歳の少年とその母親が生と死の境界を越えて会話をし、それを母親が書くという他に類をみない設定の小説。生前の普段通りと思われるやりとりは、かえってその悲しみが強調され、読むものの心を打つ。

ジョン・イヒョン『優しい暴力の時代』（斎藤真理子訳）

優しい暴力が、世界に満ちる——。ハン・ガン世代の無類のストーリーテラーによる、無名の人々の静かな心を丁寧に描いた珠玉の短編集。

ウィリアム・フォークナー『土にまみれた旗』（諏訪部浩一訳）

20世紀世界文学における最大級の物語「ヨクナパトーファ・サーガ」幻の第1作がついに初邦訳。苛烈なる生と極限の滅びを描くアメリカ南部の物語、すべてはここからはじまった。

クラリッセ・リスペクトール『星の時間』（福嶋伸洋訳）

世界はひとつのYesから始まった——リオのスラムに暮らす19歳のマカベアがみたと一瞬の光。ブラジルの伝説的女性作家による代表作にして遺作。生誕100年記念出版。

サンティアゴ・H・アミゴレーナ『心の中のゲッター』（齋藤可津子訳）

第二次大戦時、アルゼンチンに亡命したユダヤ人の主人公のもとに、故郷ワルシャワの母親がホロコーストに送られたとの報が届く。罪悪感と無力感、母子の関係の中で浮き彫りになる戦争の悲劇。

フィリップ・フォレスト『洪水』（澤田直・小黑尚文訳）

未曾有の洪水に覆われたパリを舞台に、挫折した女性ピアニスト、彼女と恋に落ちる作家、行方知れずの猫、母親の臨終など、3.11に着想を得た喪失をめぐる傑作長篇。

ショーン・タン『内なる町から来た話』（岸本佐知子訳）

どこでもないどこか、日常を超えた新しくも懐かしい魅惑の世界を描き続けるショーン・タン、待望の新作。12月21日から宮城・石ノ森萬画館で巡回展開催中！

河出書房新社

イ・ラン 『手違いゾンビ』(斎藤真理子訳)

ミュージシャン、エッセイスト、コミック作家などマルチに活躍する韓国の天才、イ・ランによる12の物語。新時代の自由を生きるための、初の小説集！

エドゥアルド・ヴェルキン 『サハリン島』(北川和美ほか訳)

北朝鮮による米軍基地攻撃から核戦争が勃発。先進国で唯一残った日本は再び鎖国をはじめ。人肉食、中国人・韓国人差別が横行するサハリン島に女子大生が潜入する近未来ディストピア小説。

ジェニー・ザン 『ひねくれた心』(小澤身子和子訳)

上海からNYに移住し極貧家庭で育つ少女が、上昇志向の親の抑圧を受けながらも成長する様をダークかつコミカルに描く、レナ・ダナムのレーベルからデビューしたアジア系アメリカ女性作家の7つの物語。

フェルナンド・アランプル 『祖国 パトリア』(上下)(木村裕美訳)

本国スペインで100万部突破、海外版權27か国に売れ、HBOテレビシリーズ決定。バスク動乱の歳月を俯瞰した大きなテーマの小説。祖国とは？ 愛国心とは？

アンナ・ツィマ 『シブヤで目を醒まして』(阿部賢一・須藤輝彦訳)

ブラハで日本文学を学ぶヤナは、消えた謎の日本人作家を追ううち自身の奇妙な「分身」に気づき——チェコの超新星による、恋と幻想とミステリーに満ちた新世代・ジャパネスク小説！

アンドリュース・キヴィラーク 『蛇の言葉を話した男』(関口涼子訳)

エストニア史上最大のベストセラー。フランスでは口コミで話題となり成功したエピック・ファンタジー。「この本はどんな本かって？ トールキン、ベケット、トウエイン、そして宮崎駿が世界の終わりに一緒に酒を呑みながら、この世の最後の焚火を囲んで語ってる、そんな話さ」

河出書房新社

チャールズ・M・シュルツ『ピーナッツ全集』全25巻（谷川俊太郎訳）

1950年から半世紀にわたって連載された『ピーナッツ』全作品を初出順に収録。既訳は全面的に見直し、新訳・単行本未収録作品も多数。チャーリー・ブラウンたちが大活躍する決定版。

クオン

クオン

❖ 今年のイチオシ

【CUON 韓国文学の名作】001

崔仁勳（チェイヌン）『広場』（吉川風訳）

今年立ち上げた「CUON 韓国文学の名作」シリーズのコンセプトは“その時代の社会の姿や人間の根源的な欲望、絶望、希望を描いた20世紀の名作を紹介する”ですが、まさにその通りの作品がこの『広場』（1960年発表）です。過去に2度翻訳されており、今回約40年ぶりに新訳で刊行しました。物語の舞台は南北に分断された朝鮮半島ですが、その狭間で葛藤し続ける主人公は様々な「分断状態」に置かれている人々の姿に重なるところがあると思います。

【韓国文学ショートショートシリーズ きむ ふなセレクション】06～07

翻訳家きむ ふなが今お薦めしたい作家の短編を日本語と韓国語で紹介するシリーズです。今年、チョン・ヨンジュン『宣陵散策』（藤田麗子訳）と、ペクスリン『静かな事件』（李聖和訳）の2作を刊行しました。『宣陵散策』は他者と、『静かな事件』は自分の過去と向かい合う様がそれぞれ描かれた短編で、心の中にそっと問いかけられたような読後感があります。

朴景利『完全版 土地』09、10、11巻

韓国現代文学史上の最高の大河小説、全五部・20巻の全訳プロジェクトが進行中です。今年第三部の09巻（吉原育子訳）、10巻（吉川風訳）、11巻（清水知佐子訳）を刊行しました。第三部で描かれているのはアジア各国で独立運動の動きが高まり、また「新女性」など新しい価値観が登場した時代です。激動の時代、登場人物たちの運命も絡み合って物語が進んでいきます。

❖ 来年の隠し球（タイトルや刊行時期は変更となる可能性があります）

【新しい韓国の文学シリーズ】

20 金薫『黒山』（戸田郁子訳）（2月刊行予定）

確固たる身分制度があった朝鮮王朝時代に、人類平等を説く天主教（ローマ・

カトリック)を信奉した人々と、信徒たちに対する朝廷からの激しい迫害を、重厚な筆致で描いた作品です。シリーズ初の歴史小説ですが、何かを命がけて信じること、身分の違いを越えて相手を尊重することなど、現代の人にも共感をもって読んでもらえる作品だと思います。

21 申京淑『申京淑短編集』(きむ ふな訳) (10月刊行予定)

同時代の女性作家の作品が次々と翻訳出版されていますが、その先輩格にあたる申京淑さんの作品をもっと紹介したいと企画を温めていました。『山のある家 井戸のある家 東京ソウル往復書簡』(津島佑子・申京淑著)を翻訳したきむ ふなさんが申京淑さんの短編の中から選りすぐった日本オリジナルの短編集です。

【韓国文学ショートショートシリーズ きむ ふなセレクション】08～10

(3、7月刊行予定)

韓国現代史の激動の瞬間やその時代を生きる人々の様子を個性的な文章で描き続けてきたパン・ヒョンソク『サバにて』(きむ ふな訳)をはじめ、イ・ジャンウク『私たち皆の鄭貴寶』(五十嵐真希)、コン・ソンオク『私の生のアリバイ』(カン・パンファ訳)の3作を3月に同時刊行。いずれの作家も小説の邦訳紹介は初となります。

そして7月には、現在開催中の翻訳コンクール受賞者の訳でユン・イヒョン『대니 (デニー)』と、パク・ボムシン『토끼와 잠수함 (ウサギと潜水艦)』を刊行します。

【CUON 韓国文学名作シリーズ】

002 呉圭原『呉圭原詩選集』(吉川凧訳) (2月刊行予定)

茨木のり子さんによる『韓国現代詩選』でも作品が紹介されている詩人呉圭原は、クオン代表の金承福の恩師でもあります。オリジナルの詩集を「CUON 韓国文学名作シリーズ」から刊行します。

クオン

003 李清俊『噂の壁』(吉川凧訳) (9月刊行予定)

『噂の壁』は李清俊の代表作の一つで、1971年に発表された中編小説です。周囲の圧力によって精神を病んでしまった作家の物語を通して、社会通念の持つ暴力的な一面について語っています。

Axt インタビュー集『これは私の斧だ』01、02 (3月、6月刊行予定)

韓国の文芸誌『Axt』の人気連載記事「小説家による小説家のインタビュー」を単行本化した『これは私の斧だ』の翻訳版です。孔枝泳、キム・ヨンス、チョン・ユジョン、チョン・ミョンガンらのロングインタビューを、その作家の作品を紹介してきた翻訳家の訳文でお届けします。さらに日本語版ではキム・グミ、ピョン・ヘヨン、イ・ギホらのインタビューも収録しました。

『李箱文学賞受賞作家による自伝的エッセイ集 (仮題)』(5月刊行予定)

韓国の文学賞のなかで最も権威ある「李箱文学賞」。受賞者は受賞のことばとともに「文学的自叙伝」を発表する習わしになっています。どのようにして作家になったのか、どのように作品を書いているのか、人生の経験がどのように作品に昇華されているのか——作家自身のことを知ることができると同時に、人生哲学も感じられるエッセイの数々。自叙伝の発表が始まった1993年受賞の崔秀哲から2019年の受賞者ユン・イヒョンまでの「文学的自叙伝」が収録されています。

『完全版 土地』12巻、13巻 (6月、11月刊行予定)

2020年は、第三部の完結(12巻)を吉川凧さんの訳で、第四部の冒頭(13巻)を清水知佐子さんの訳でお届けします。今後は年2巻ペースで進行し、20巻目の刊行は2024年の予定です。

【韓国文化シリーズ】

02『韓国文学100年史』(12月刊行予定)

今年9月から始まった「CHEKCCORI大学 韓国文学100年を学ぶ(講師: きむ ふな)」を書籍化します。韓国近代文学の始まりから今日まで、約100年

クオン

にわたる韓国社会の変化と文学の変遷をたどることができ、韓国文学に興味のある人にぜひ手に取ってほしい一冊です。

国書刊行会

国書刊行会

👑 今年のイチオシ

パオロ・コニエッティ他『どこか、安心できる場所で 新しいイタリアの文学』（関口英子・橋本勝雄・アンドレア・ラオス編）

2020 年刊行予定（タイトルはすべて仮題）

A・N・L・マンビー『アラバスターの手 マンビー古書怪談集』（羽田詩津子訳）

オノレ・ド・バルザック『サンソン回想録』（安達正勝訳）

〈新しいマヤの文学〉全3巻（吉田栄人編訳）

ソル・ケー・モオ『女であるだけで』

ホルヘ・ミゲル・ココム・ペッチ『言葉の守り人』

A・P・マルチネス・フチン&I・E・カリージョ・カン『夜の舞・解毒草』

ボブ・ワード『ドクター・スペース』（日暮雅通訳）

〈シュルレアリスム叢書〉全5巻

A・ブルトン他『磁場・処女懐胎』（中田健太郎訳）

P・スーポー『パリ最後の夜』（谷昌親訳）

〈ベル・エポック怪人小説叢書〉全3巻

レオン・サジ『ジゴマ』（安川孝訳）

R・スヴェストン&M・アラン『ファントマと囚われの女』（赤塚敬子訳）

ガストン・ルルー『シェリ=ビビとセシリー』（宮川朗子訳）

〈ボウエン・コレクション〉第2期・全3巻（太田良子訳）

『北へ』

『ホテル』

『友達と親戚』

ベルンハルト・ケラーマン 『トンネル』 (秦豊吉訳)

アルベルト・コーエン 『おお、あなた方人間、兄弟たちよ』 (紋田廣子訳)

チャールズ・フォート 『呪われた者の書』 (南山宏訳)

E・T・A・ホフマン 『ホフマン作品集』 (石川道雄訳)

〈ウッドハウス新シリーズ〉 (森村たまき訳)

ボリス・ヴィアン 『全シャンソン集』 (浜本正文訳)

R・L・スティーヴンソン 『爆弾魔』 (南條竹則訳)

〈マニユエル伝3〉

『土の人形』 (安野玲訳)

『ケネス・モリス作品集』 (館野浩美・中野善夫訳)

トマス・M・ディッシュ 『SFの気恥ずかしさ』 (姫嶋由布子訳)

『ユーモア・スケッチ大全』 全5巻 (浅倉久志訳)

ウィリアム・トレヴァー 『ラスト・ストーリーズ』 (榎木伸明訳)

〈トレヴァー・コレクション〉

ウィリアム・トレヴァー 『ディンマスの子供たち』 (宮脇孝雄訳)

国書刊行会

パトリック・マッケイブ『ブッチャー・ボーイ』（矢口誠訳）

〈未来の文学〉

ガードナー・ドゾワ他『海の鎖』（伊藤典夫編訳）

『ジーン・ウルフ短篇集』（若島正編）

『ジョン・ウォーターズの地獄のアメリカ・ヒッチハイク旅行』（柳下毅一郎訳）

〈ドーキー・アーカイヴ〉

ステファン・テメルソン『イワシの缶詰の謎』（大久保護訳）

アイリス・オーウェンズ『アフター・クロード』（渡辺佐智江訳）

『アルフレッド・ジャリ全集』（大崎明子他訳）

集英社

👑 今年のイチオシ

ヨアブ・ブルーム『偶然仕掛け人』（高里ひろ訳）

指令に基づき、偶然の出来事が自然に引き起こされるよう暗躍する秘密の存在——それが「偶然仕掛け人」。日々淡々と業務をこなしていた新米偶然仕掛け人ガイのもとに、ある日何とも困惑する指令が届く……。イスラエル発、ライトで不思議な現代ファンタジー。あなたの偶然ホンモノですか？

レイチェル・コン『さようなら、ビタミン』（金子ゆき子訳）

婚約者に去られたルースは、仕事を辞めてアルツハイマー病を患う大学教授の父親の介護を手伝うことになったのだが……。辛い現実を軽やかなタッチで描き、全米の話題をさらった日記形式の家族小説。ミランダ・ジュライも絶賛！

ユーディット・W・タシュラー『国語教師』（浅井晶子訳）

16年ぶりに再会した、有名作家の男と国語教師の女。元恋人同士のふたりはかつてのように物語を創作して披露し合う。しかしこの戯れが、過去の忌まわしい事件へ繋がっていき……。ドイツ推理作家協会賞受賞の文芸ミステリー。

クリステン・ルーペニアン『キャットパーソン』（鈴木潤訳）

スマホ越しのロマンスに身を焦がす女子大生、理想の伴侶を探し求める王女、イケメン上司にかみつきたいOL、女性にとっての「いい人」目指して迷路にはまる男性……現代社会に生きる私たちの小さな「欲望」がたどり着く先のそのまた先を、“ぞわぞわ”感たっぷりに描く話題の新人の短篇集。

ホリー・リングランド『赤の大地と失われた花』（三角和代訳）

事故で両親を亡くし心に傷を負った9歳のアリスは、初めて会う祖母が運営するオーストラリア固有種の花農場に連れていかれる。虐待やDV、過酷な運命を迎える少女に勇気をくれたのは、独自の花言葉だった……。配信ドラマ化決定、30カ国で著作権が取得された衝撃の長篇デビュー作。

チョン・ソヨン『となりのヨンヒさん』（吉川風訳）

スジョンの住む部屋の隣には、ガマガエルのような容貌の異星人が住んでいる。ある日偶然から隣人をお茶に招くことになり……（表題作）。同性愛、フェミニズム、差別と情報統制——マイノリティからのまなざしを受け止めつつ人々の挫けぬ心を繊細に描く、韓国 SF 短篇集全 15 編。

❖ 来年の隠し玉

アフマド・サアダーウィー『バグダードのフランケンシュタイン』（仮題）（柳谷あゆみ訳）

荒廃する街。爆破テロで亡くなった人々の遺体のパーツを一つの体に継ぎ合わせた身体は意思を持ち、ゴーレムとして動き出す……。痛烈な社会批判と悲しみを描く、アラビアの本屋大賞受賞、プッカー国際賞最終候補、アーサー・C・クラーク賞最終候補となった衝撃作。

クロエ・ベンジャミン『THE IMMORTALIST』（原題）（鈴木潤訳）

もし、幼くして寿命を告げられたら、人はいかに生きるのか？ そのことで運命も変わってしまうのか？——遊び半分で霊能者に会いに行き、それぞれ自分の死ぬ日を告げられたマンハッタンのユダヤ人家庭に育つ四人姉弟の、その後の 40 年を描く話題作。

アディーブ・コーラム『DARIUS THE GREAT IS NOT OKAY』（原題）（三辺律子訳）

紅茶と人形遊びが好きなダリウス少年が、祖父の病をきっかけに、初めて自らのルーツであるイランへ向かうことに。ジェンダーや国籍、心の病など、生きづらさを抱えた少年の成長物語。ウィリアム・C・モリス賞など複数の賞を獲得した YA。

アンヌ＝マリー・ルヴォール『L'ÉTOILE RUSSE』（原題）（河野万里子訳）

ソ連の英雄ガガーリンを巡る連作短編集。ライバルの宇宙飛行士やガガーリ

集英社

ンに憧れる少女、フランスのジャーナリストなど様々な人物を主人公に据えて、ヒーローに祭り上げられた男の悲哀と、ソ連の体制と市井の人々を描く。

新潮社

◆今年のイチオシ

ジュンパ・ラヒリ『わたしのいるところ』（新潮クレスト・ブックス）（中島浩郎訳）

歩道で、仕事場で、トラットリアで、本屋で、美術館で、スーパーで、母の家で、駅で……。生まれ育ったローマと思いき町に暮らす45歳の「わたし」。親しい道づれのような彼女の孤独とその旅立ちの物語。エッセイ『べつの言葉で』に続いてラヒリがイタリア語で書きあげた初の長篇。（クレスト冊子p.1にロングインタビュー掲載）

ウェイク・ワン『ケミストリー』（新潮クレスト・ブックス）（小竹由美子訳）

中国から血のにじむ思いで移民した両親、その期待に応えられず自分をもてあます「わたし」。研究も恋愛も、どうしてうまくいかないの？ こじれにこじれたリケジョの思いが行きつく先は——。PEN／ヘミングウェイ賞受賞、ホワイティング賞受賞、注目の中国系アメリカ人作家のデビュー作。

ロベルト・ゼーターラー『ある一生』（新潮クレスト・ブックス）（浅井晶子訳）

アルプスの山とともに20世紀を生きた名もなき男の生涯が、なぜこんなにも胸に迫るのだろう。従軍と抑留生活を除けば村から出ることもなく、理不尽ばかりの運命と環境をひとりしずかに生きた男の誰とも比べることのない満ち足りた人生。オーストリアの心ゆすぶられる物語。

リチャード・パワーズ『オーバーストーリー』（木原善彦訳）

2018年の原著刊行以来、アメリカ読書界の話題をさらい、今年度のピューリッツァー賞小説部門を受賞した超大作。100メートル近い巨木がそびえる、アメリカに最後に残った手付かずの森。この森を開発の手から守る戦いを中心に、人々と樹木とのさまざまなつながりを、南北戦争から20世紀末にわたる壮大なスケールで描く。「いい物語は人を少し殺す。人を前とは違ったものに変える」（本文より）

👑 来年の隠し球（基本的に仮題）

トマス・ピンチョン『ブリーディング・エッジ』（佐藤良明、栩木玲子訳）

9.11の同時多発テロが起きた世界を舞台にした、アメリカ現代文学に君臨する謎の巨人の、現時点での最新作。佐藤良明氏＋栩木玲子氏の最強コンビでついに翻訳成る。

ミシェル・フーコー『性の歴史 第四巻 肉の告白』（慎改康之訳）

権力、快楽、知の関係が、社会のなかでいかに成立しているか、性の問題を中心に据え、古代ギリシア、ローマから現代まで、その諸相を論じた『性の歴史』。生前に第三巻まで仕上げられ、第四巻の校正中にフーコーは死去。2018年、死後34年目にして刊行され、世界中で大きな話題に。2020年待望の邦訳刊行。

2020年

1月

シーグリッド・ヌーネス『友だち』（新潮クレスト・ブックス）（村松潔訳）

初老を迎えた女性作家にとって、誰よりも心を許せる男友だちが自殺した。彼の恋人でも愛人でもなかったが、心に大きな空洞を抱えた彼女は、男が飼っていた巨大な老犬と暮らすこととなり、死について、犬と人間のかかわりや、記憶や書くことについての思索を綴ってゆく。2018年の全米図書賞受賞作。

2月

ポール・オースター『サンセット・パーク』（柴田元幸訳）

舞台はリーマンショック直後のアメリカ。夜逃げした家屋の残存物撤収を請け負うマイルズは旧友に誘われ、サンセット・パークにある廃屋に暮らし始める。それぞれに痛みを抱えた男女4人の共同生活を通じて、両親との不和を抱えてきたマイルズは自己を回復してゆく。ブルックリンを舞台にした青春群像劇。

新潮社

〈新潮クレスト・ブックス〉4月以降順不同

ベルンハルト・シュリンク『オルガ』(ドイツ)(松永美穂訳)

ベルナルド・アチャガ『アコーディオン弾きの息子』(スペイン、バスク語)
(金子奈美訳)

ペーター・テリン『死後』(ベルギー、オランダ語)(長山さき訳)

リュドミラ・ウリツカヤ『緑の天幕』(ウクライナ)(前田和泉訳)

カルミネ・アバーテ『結婚式の宴』(イタリア)(関口英子訳)

イアン・マキューアン『私のようなマシーン』(イギリス)(村松潔訳)

……ほか

〈こんな本も〉

カーソン・マッカラズ『心は孤独な狩人』(村上春樹訳)

アメリカ南部に暮らす人々を描いた女性作家、カーソン・マッカラズ 23 歳の鮮烈なデビュー作。いつも物静かで優しい壟喑の青年シンガーに、それぞれに孤独を抱えた4人の隣人が信頼を寄せ、報われない愛を寄せていく。絶版になって久しい名作が、村上春樹の新訳でよみがえる。

クリストファー・イシャウッド『キャスリーンとフランク』(横山貞子訳)

20世紀を代表する詩人イシャウッド(1904-1986)が、母キャスリーンの日記と父フランクの手紙によって、両親の出会いと結婚、戦争、父の戦死、母のその後の人生を辿った記録文学。哲学者・鶴見俊輔が、あまりの面白さに生涯3度読み返したと語っていた本書を、ディネセン、オコナーの翻訳で知られる横山貞子訳で。

水声社

2019年

1月

カメル・ダーウド『もうひとつの「異邦人」』（叢書エル・アトラス）（鶴戸聡訳）

現代アルジェリアを代表する作家によるゴンクール新人賞受賞作。あまりにも有名な『異邦人』を下敷きに、ムルソーに殺害された「アラブ人」の兄弟が、アラブの側からムルソーそしてカミュがアルジェリアにもたらした暴力性について物語る。（『異邦人』をアラブ側から描きます！）

2月

アブドゥラマン・アリ・ワベリ『トランジット』（フィクションの楽しみ）（林俊訳）

日夜多くの人が訪れ、出会いと別れを繰り返すシャルル・ド・ゴール空港を舞台に、トランジットで降り立ったひとびとのモノローグ（うち一人はピン・ラディン!?!）を通して、欧米列強の支配から、部族対立による内戦へと混迷を深めるジブチ現代史の内実を、「難民たち」「亡命者たち」の声によってあぶり出します。

イト・ナガ『私は知っている』（中山慎太郎訳）

「ぼくは思い出す、……」の形式を打ち出したジョー・ブレイナード——ジョルジュ・ペレックの本歌取り！ 469の「私は知っている」ことを積み上げ、ユーモアと新鮮味の尽きないこの世界を眼差す、異色の詩集です。

4月

フィリップ・ソレルス『本当の小説 回想録』（フィクションの楽しみ）（三ツ堀広一郎訳）

フランスの文壇を疾走しつづけたソレルスの回顧録!? アラゴンも、パタイユも、ラカンも、バルトも顔を覗かせ、68年の文学と政治の季節を、そして女性との放蕩を赤裸々に（？）語った、自伝的小説。

水声社

アナイス・ニン『炎へのはしご』（三宅あつ子訳）

家庭を捨て自責の念にかられるリリアン、その前に現われる生き生きとしたジューナ、そして破滅的なサビーナ、ヘレン。画家ジェイを間にお互い響き合い、共感の愛を見出し自己を探究していく女性たち。アナイス・ニンがヘンリー・ミラー、その妻らをモデルにモダニズムのバリを舞台に描く愛の遍歴。

レオナルド・パドゥーラ『犬を愛した男』（フィクションのエル・ドラード）
（寺尾隆吉訳）

1977年のハバナ、物書きのイバンは、ボルゾイ犬を連れて散歩する不思議な男、〈犬を愛した男〉と出会う。次第に親密になっていくなかで、男は彼のみぞ知る〈トロツキー暗殺の真相〉を打ち明けはじめる……世界革命を夢見るレフ・ダヴィドヴィチ（トロツキー）の亡命、暗殺者ジャック・モルナルに成り代わるスペイン人民戦線の闘士ラモン・メルカデル、そして舞台はメキシコへと至る。イデオロギーの欺瞞とユートピア革命が打ち碎かれる歴史＝物語を力強い筆致で描く、現代キューバ文学の金字塔。

6月

フェリスベルト・エルナンデス『案内係』（フィクションのエル・ドラード）
（浜田和範訳）

暗闇で目が光る語り手の秘密の遊び、必殺の泣き落としで業績を叩き出す営業マン、水を張った豪邸に一人すむ老人……ガルシア・マルケスも愛読してやまなかった、ウルグアイの奇才が放つ謎めいた短篇の数々を日本オリジナル編集でお届けします。

パスカル・キニャール『音楽の憎しみ』（パスカル・キニャール・コレクション）
（博多かおる訳）

音楽は心地よく、喜びと活力をもたらすだけではない。時にそれは人に恐怖と憎悪の念を抱かせことがある——誕生以来、人類を揺さぶり続けてきた音楽に対して古今東西の文学を響かせる、文学による思索／詩作。新訳！

セース・ノーテボーム『サンティアゴへの回り道』（吉用宣二訳）

オランダを代表する現代作家の詩的な旅行記。サンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼の途上で現在と過去を縦横に思索するその筆致と挿入される写真は、ゼーバルト的な味わいをもたらす。（松永美穂訳『儀式』も出ている作家です！）

10月

ヘンリー・ミラー『冷暖房完備の悪夢』（ヘンリー・ミラー・コレクション 16）（金澤智訳）

第二次世界大戦前、1940年から丸一年かけてニューヨークから西海岸までアメリカ横断の旅にでたミラー。実利優先社会のアメリカにおいて、真に自然の営みや、信仰と愛に裏打ちされた文化がないと綴った、先見的な旅行記=文明批評。本巻にて、ヘンリー・ミラー・コレクションついに完結！

12月

ギジェルモ・カブレラ・インファンテ『気まぐれニンフ』（フィクションのエル・ドラード）（山辺弦訳）

魅力あふれる16歳の少女エステラとの運命的な出会いから愛の逃避行におよぶ主人公。ハバナの街を巡るひと夏のアヴァンチュールの終着点とは？ 永遠なる《ニンフ》との思い出を言葉遊びに溢れた軽妙洒脱な会話で描き出す、言葉の曲芸師カブレラ・インファンテの快作。インテリおやじが若者に恋するキューバ版『ロリータ』。

アラン＝ロブ・グリエ『ある感傷的な小説』（フィクションの楽しみ）（的場寿光訳）

少女に対する偏愛！ 強迫的なまでにサディスティックな性癖!! 常軌を逸した過激で暴力的な描写によって、少女たちの監禁や虐待の場面をはじめ、露骨なまでに作家に取り憑いた妄想を描き出す、遺作となった〈大人のためのファンタジー〉。

水声社

ジェラルド・マセ 『つれづれ草』(桑田光平訳)

ジャラルド・マセ 『帝国の地図——つれづれ草Ⅱ』(千葉文夫訳)

ピエール・ド・マンディアルグが見出し、『最後のエジプト人』(白水社)で独自の筆致を垣間見せたフランス文学の孤峰が、思考と表現の彫琢をいかにして〈簡潔〉に示せるかを試みた、連作エッセイを2冊同時刊行！ パスカル・キニャールが好きな方はぜひ！

2020年

ドストエフスキー 『【詳註版】カラマゾフの兄弟』(杉里直人訳)

見過ごされてきた誤訳の指摘や、読み飛ばしがちな19世紀ロシアの複雑な司法・教育制度、ファッション、宗教、文化、自然などの詳細な解説を含む膨大な訳注を収録した、これまでの邦訳では味わえない新たな『カラマゾフ』体験を可能にする決定版。(本文・注、二巻函入の豪華本です！)

キャサリン・バーデキン 『鉤十字の夜』(日吉信貴訳)

時は西暦26XX年。19XX年の世界最終戦争で圧勝を収めたナチス・ドイツが「神聖ドイツ帝国」を樹立し、同じく戦勝国たる「日本帝国」と世界の覇権を争う時代、女性は出産だけを担う家畜的存在としてゲッターに収容されている。そんななか、従属民族のアルフレッドは帝国開闢の真相を物語る禁書を手にする……1937年にイギリスで刊行され、ナチス・ドイツのみならず、男性中心社会を痛烈に批判した、フェミニスト・ディストピア小説。

アルノ・シュミット 『レヴィアータン』(アルノ・シュミット・コレクション)

(窪俊一訳)

20世紀ドイツが生んだ最大の前衛作家の処女短篇集。ポーに学んだ手記形式の一人称を用いて、過去・現在・未来の世界で孤独に生きる個人の寂寥と絶望を計算的に描き出す。(ブラセンシアに先んじた超絶技巧作家！)

ドン・デリーロ 『ホワイト・ノイズ』(都甲幸治訳)

いわずと知れたドン・デリーロの代表作をついに新訳！ 「ヒトラー学」を

教える大学教授のジャック、いきすぎた健康志向の妻バベットとその家族、事故によって辺りに広まる致死性の化学物質……死の恐怖に侵された日常の有様を冷静な筆致で描き出した名作。

アレホ・カルペンティエール『時との戦い——カルペンティエール短編集』（フィクションのエル・ドラード）（寺尾隆吉訳）

『失われた足跡 時との戦い』（集英社、1984）の収録作4編（「聖ヤコブの道」「種への旅」「夜の如くに」「選ばれた人々」）に加え、3編（「闇夜の祈禱」「逃亡者たち」「庇護権」）を収録し、生前、カルペンティエール本人が編纂した『短編集全集』を名翻訳者2名の手で完全再現！ 長編のみならず、短編にも発揮された作家の「時」を巡る手腕は十分な読み応え間違いなしです。

ブアレーム・サンサール『ドイツ人の村——シラー兄弟の日記』（青柳悦子訳）

嫌味なまでに非の打ちどころのない完璧な兄が、突如自殺し、変わり果てた姿とともに弟に遺されたのは4冊の日記だけだった。そこには、兄の苦悩の旅が、ナチスに関与したドイツ人の父の物語が、そして風化させることのできない虐殺の歴史が記されていた——アルジェリアとフランス、そしてドイツまでヨーロッパ全土をつなぐ一本の悲劇とそれに立ち向かい、語り継ぐ兄弟の勇姿！

白水社

白水社

👑 今年の（2019年）の自信の1球

ハン・ガン『回復する人間』（斎藤真理子訳）

国際ブッカー賞受賞作家による七つの短篇。大切な人の死、自らを襲う病魔など、絶望の深淵で立ちすくむ人びと……心を苛むような生きづらさに、光明を見出せるのか？

2019年

1月

【Uボックス 海外小説 永遠の本棚】

フラン・オプライエン『ドーキー古文書』（大澤正佳訳）

アイルランド文学の異才、最後の傑作。海辺で出会った紳士は人類絶滅を計画していた。死者との対話、自転車人間説、生きていたジョイスなど、奇想とほろ苦い笑いに満ちた狂想的喜劇。

2月

チョ・ナムジュほか『ヒョンナムオッパへ——韓国フェミニズム小説集』（斎藤真理子訳）

『82年生まれ、キム・ジョン』の著者による表題作ほか、ミステリーやSFなど多彩な形で表現された韓国の若手実力派女性作家7名による短篇集。

3月

【エクス・リブリス】

郝景芳『郝景芳短篇集』（及川茜訳）

ケン・リュウも注目の中国SF作家、初の短篇小説集。ヒューゴー賞受賞の表題作ほか、社会格差や高齢化、医療問題など、中国社会のさまざまな問題を反映した全7篇。

4月

【エクス・リブリス】

デニス・ジョンソン『海の乙女の惜しみなさ』（藤井光訳）

鬼才が死の直前に脱稿した、『ジーザス・サン』に続く26年ぶりの第二短篇集。最後まで持ち前のユーモアを発揮した全5篇を収録、「老い」と「死」の色濃く漂う遺作。

スチュアート・ダイベック『路地裏の子供たち』（柴田元幸訳）

『シカゴ育ち』『僕はマゼランと旅した』の作家による第一短篇集。少年の日々を追想する、心に残る11篇。日本の読者への特別寄稿を付す。

【Uブックス 海外小説 永遠の本棚】

残雪『カッコウが鳴くあの一瞬』（近藤直子訳）

「彼」を探して彷徨い歩く女の心象風景を超現実的な手法で描いた表題作ほか、夢の不思議さを綴る夜の語り手、残雪の初期短篇を集成。

6月

スティーヴン・ミルハウザー『私たち異者は』（柴田元幸訳）

優秀な短篇に授与される「ストーリー・プライズ」受賞、驚異の世界を緻密に描き、リアルを現出せしめる匠の技巧。表題作や「大気圏外空間からの侵入」ほか、さらに凄みを増した最新の7篇。

7月

【Uブックス 海外小説 永遠の本棚】

残雪『蒼老たる浮雲』（近藤直子訳）

隣り合わせの家に住む二組の夫婦の奇妙な生活。異様なイメージと出来事が奔流のように押し寄せる、現代中国文学の最前衛、残雪の衝撃作。表題作の中篇に初期短篇3作を併録。

白水社

8月

【エクス・リブリス】

ピョン・ヘヨン『モンスーン』（姜信子訳）

韓国現代文学の到達点を示す短篇集。李箱文学賞を受賞した「モンスーン」から最新作まで、都市生活者の日常に潜む謎と不条理、抑圧された生の姿を鋭く捉えた9篇。

【Uブックス 海外小説 永遠の本棚】

シャーロット・ブロンテ『ヴァイレット』（上下）（青山誠子訳）

異国の街で寄宿学校の教師として生き、運命を切り開く孤独な英国人女性の苦闘と恋の物語。『ジェイン・エア』と並ぶもうひとつの代表作。

10月

リン・イーハン アイン・スーチャー 林奕含『房思琪の初恋の樂園』（泉京鹿訳）

房思琪は高級マンションに住む13歳の文学好きな美少女。憧れの国語教師から性的虐待を受ける関係に陥り……台湾で25万部突破、社会を震撼させ、台湾社会の闇を抉る衝撃作！

トーマス・C・フォスター『大学教授のように小説を読む方法』（増補新版）（矢倉尚子訳）

小説好き必読の一冊！ シェイクスピアや聖書の引用、天気や病気の象徴的使い方、性的比喩、隠された政治的意図……小説の筋だけでなく、一步踏み込んで読み解くための27のヒント。

12月

バレリア・ルイセリ『俺の歯の話』（松本健二訳）

「世界一の競売人」が教会の資金集めオークションにかけたものとは？ 現実とフィクションを融合させ、読者を煙に巻き、思わぬ結末へと導く。世界15か国で翻訳、メキシコ出身の新鋭による話題作！

【U ブックス 海外小説の誘惑】

サンドラ・シスネロス『サンアントニオの青い月』（くぼたのぞみ訳）

言葉がおどりと、魂がかがやく全 22 篇。希望と挫折が交差するメキシコとの国境の町で、ひたむきに生きながら、力強く立ち上がる女たちの圧倒的な声の集積。解説：金原瑞人

❖ 来年の隠し玉（すべて仮題）

1 月

【エクス・リブリス・クラシックス】

H・G・ウェルズ『ポリー氏の人生』（高儀進訳）

人生の「おぞましい穴ぼこ」に嵌まり込んだ男の起死回生の物語。「SF の父」が自身の青少年時代を投影し、下層中産階級の苦悩をコミカルかつ哀切に描く。作家自ら「最愛の作品」と認める自伝的長篇小説。

【U ブックス 海外小説 永遠の本棚】

ナターリヤ・ソコロワ『旅に出るときほほえみを』（草鹿外吉訳）

怪獣は歌う、《人間》のために。合金の骨格に緑色の人工血液、生肉を動力源とする鉄製の怪獣 17P は、前肢の鑿岩機で地中を進み、また拙いながら人間のことも話した。金属製の怪獣の歌声が心に響く、現代のおとぎ話。

2 月

W・G・ゼーバルト『新装版 アウステルリッツ』（鈴木仁子訳）

4 月

【エクス・リブリス】

テレツィア・モーラ『よそ者たちの愛』（鈴木仁子訳）

ドイツ最高の文学賞、ビューヒナー賞、ブレーメン文学賞受賞作。作家は崩壊後にハンガリーからドイツに移住し、ドイツ語で執筆を開始したが、「移民文学」とは一線を画す。大都市の片隅でもがきつつ、不器用に生きる「よそ者たち」の 11 の物語。

白水社

W・G・ゼーバルト『新装版 移民たち』（鈴木仁子訳）

5月

【エクス・リブリス】

ダヴィド・フェンキノス『シャルロッテ』（岩坂悦子訳）

アウシュヴィッツ強制収容所で26歳の若さで命を落としたユダヤ人画家シャルロッテ・ザロモン。彼女の知られざる生涯を、散文詩のような一行を積み重ねて描く。世界22か国で翻訳され、ルノー賞、「高校生が選ぶゴンクール賞」などを受賞した、フランスの人気作家の新たな代表作。

W・G・ゼーバルト『新装版 目眩まし』（鈴木仁子訳）

6月

ステイーヴン・ミルハウザー『夜の声たち vol.1』（柴田元幸訳）

16の短篇を各8篇に分けて全2巻で刊行。2010年代からの新作が中心で、その充実ぶりと多様性は、60～70代と老いてますます冴えわたる。「短篇の名手」による驚異の世界。

W・G・ゼーバルト『新装版 土星の環』（鈴木仁子訳）

イーヴリン・ウォー『誉れの剣1 もののふども』（小山太一訳）

自身の戦争体験をもとに書き上げた集大成的作品《誉れの剣》三部作。名家出身の中年男ガイ・クラウチバックが「大義」に身を捧げようと陸軍に志願、第二次世界大戦の戦場に赴くが、そこで旧来の紳士の理想が崩壊していく様を目撃、幻滅を味わう。「第二次大戦が生んだ最も優れたイギリス小説」と評される名作、本邦初訳！（続巻『士官と紳士たち』『無条件降伏』）

7月

【Uブックス 海外小説 永遠の本棚】

イタロ・カルヴィーノ『まっぷたつの子爵』[新訳]（村松真理子訳）

8月

【エクス・リブリス】

ジョゼ・エドゥアルド・アグアルーザ『忘却についての一般原理』(木下眞穂訳)
本邦初訳のアンゴラの作家による、詩的でユーモアに満ちた傑作長篇。実在の女性に着想を得て描かれ、ダイヤモンドを飲みこんだ伝書鳩、行方を絶ったジャーナリストなど、魅力的かつミステリアスな逸話が散りばめられている。ポルトガルのフェルナンド・ナモーラ文芸賞、国際IMPACダブリン文芸賞受賞作。

9月

王徳威／高嘉謙／黄英哲『華語語系文学シリーズ第1巻 華と夷の響き』(及川茜編／濱田麻矢、津守陽ほか訳)

華語語系文学とは、中国話者が創作する文学を指し、その多様な声の響き合いを重視した文学概念。近年、台湾その他の華語社会で大きな注目を集めている。第1巻は中国、新疆ウイグル族自治区、台湾、香港、マレーシアなどの作家の小説から詩歌、散文、ルポルタージュまでを含む、華語語系文学の多元性を示す20篇を収録。

ガイト・カズダーノフ『クレールとの夕べ／アレクサンドル・ヴォルフの亡霊』(望月恒子訳)

1930年代にはナボコフに勝るとも劣らない評価を受けていた亡命ロシア人作家による2篇。19世紀ロシア文学の伝統にプルースト的な文体を接続しているのが魅力で、近年再評価が進んでいる。

10月

【エクス・リブリス】

アザリーン・ヴァンデフリート・オールミ『私はゼブラ』(木原善彦訳)
ペン／フォークナー賞受賞作。イラン系・オランダ系アメリカ人作家による、機知と不条理がはじけ、ユーモアと辛辣さが光る長篇小説。「文学以外のものは愛してはならない」と教え込まれた主人公ゼブラの旅路は『ドン・キホーテ』

白水社

を思わせるピカレスク小説。

12月

【エクス・リブリス】

バク・ソルメ 『すでに死んでいる十二人の女たち』（斎藤真理子訳）

著者は1985年生まれの韓国女性作家。原発をテーマにした小説を発表するなど、社会問題に鋭くアプローチし、独特の乾いた文体が特徴。デビュー以来韓国文学の新しい可能性を担う作家として注目を集めている。これまで発表された全作品の中から精選した8篇を収録した日本語版オリジナル短篇集。

【エクス・リブリス・クラシックス】

アンドレイ・プラトーフ 『幸福なモスクワ』（池田嘉郎訳）

すでに20世紀ロシア文学の「古典」となっているプラトーフの代表作のひとつ。スターリン体制下での首都モスクワの改造と、共産主義社会がめざす「新しい人間」としてのヒロインが、有機的に一体化したものとして描かれる。

スティーヴ・エリクソン 『シャドウバーン』（柴田元幸訳）

21世紀も四半世紀を過ぎたころ、サウスダコタの不毛地帯に、消滅した「ツインタワー」が突如出現する。一方のタワーで目覚めたのは、プレスリーの双子の兄だった（現実には死産に終わったジェシー・プレスリー）。プレスリーが生まれなかった、もうひとつの21世紀を幻視する。

王徳威／高嘉謙／黄英哲／黄錦樹 『華語語系文学シリーズ第2巻 南洋人民共和国備忘録』（及川茜編／福家道信ほか訳）

マレーシア華人を代表する作家、黄錦樹の短篇集。著者は1967年にマレー半島で生まれ、地元の中学・高校を卒業後、台湾に渡った。現在に至るまで故郷マレーシアの歴史の傷痕、華人社会と文化の苦しみを描く物語を書き続けている。

2021 年

3 月

王徳威／高嘉謙／黄英哲／李永平『華語語系文学シリーズ第3巻 朱鶴ものがたり』（及川茜編訳）

著者の李永平は、1947年英領ボルネオ島サラワク生まれ。高校卒業後に台湾に移り、台湾大学卒業後に渡米、ニューヨーク州立大学、セントルイス・ワシントン大学で比較文学修士号を取得した後、台湾に戻り創作を続けた。本書は12歳の少女が台北からボルネオに送りこまれ、冒険の旅を語るファンタジー。李永平は「マレーシア」という国家に帰属することを拒み続け、英領ボルネオ島サラワクの植民地の華人だという意識を強く持っていた。その象徴的な作品。

早川書房

★今年のイチオシ

レティシア・コロンパニ『三つ編み』(齋藤可津子訳)

大好評7刷! 三つ編みのように絡み合う3人の女性の人生。立ちほだかる困難・差別と闘うことを選んだとき、彼女たちの物語はつながり、希望をつむぎだす。小山田浩子氏、小橋めぐみ氏、絶賛!

ニック・ドルナソ『サブリーナ』(B5判変型 グラフィックノベル) (藤井光訳)

サブリーナが行方不明になって、ひと月が経った。彼女に何が起きたかが判明したとき、メディアの報道は過熱し、残された人々は想像もしなかった事態に襲われる。グラフィックノベル初のブッカー賞候補作は、人の心に潜む悪意や無邪気な不気味さをえぐりだす。

★来年の隠し球 メインの2球 (書名・刊行月は変更の可能性があります)

ディーリア・オーエンズ『ザリガニの鳴くところ』(友廣純訳)

湿地で発見された青年の死体。殺人を疑われた「湿地の少女」は、果たして犯人なのか……ノースカロライナのちいさな村で起きた不審死の顛末と、厳しい自然と人々の偏見の中ひとり生き抜く少女の姿を描く。全米400万部の大ヒット作。

マーガレット・アトウッド『THE TESTAMENTS』(齋藤英治訳)

ディストピア小説『侍女の物語』の15年後を描いた続篇。リディア小母がなぜ「小母」となったのかが明らかに。ブッカー賞受賞作。

2月

ジャーニーン・カミンズ『夕陽の道を北へゆけ』(宇佐川晶子訳)

原書刊行前ながら全米で話題沸騰の注目作! アカプルコで書店を営むリディアの幸せな日々は、カルテルに家族16人を殺されて崩壊した。彼女は唯一生き残った息子のルカと二人、アメリカへ向かう過酷な逃避行を始める。明日

も生き延びることを信じて進みつづける人々を描いたロードノベル。

3月

ディーリア・オーエンズ『ザリガニの鳴くところ』（友廣純訳）

4月

セラハッティン・デミルタシュ『セヘル（仮）』（鈴木麻矢訳）

「クルドのマンデラ」と呼ばれるトルコ大統領エルドアンの政敵が獄中で執筆した短篇集。「名誉の殺人」についての表題作や、トルコ・シリア国境のハタイの豊かな食文化とテロを並べて綴った「アレppo挽歌」など、人々の生活を容赦なく打ち砕く理不尽、それでも消えない希望を描く。

5月

レティシア・コロパニ『Les Victorieuses』（齋藤可津子訳）

『三つ編み』著者の新作！ パリの「駆け込み寺」を舞台に、貧困や不条理と闘う女性たちを描く感動作。

エイモア・トールズ『Rules of Civility』（宇佐川晶子訳）

舞台は1937年のニューヨーク。25歳のケイティは、偶然バーで隣り合ったハンサムな銀行家との出会いをきっかけに、上流社会への階段を駆け上がる。『モスクワの伯爵』著者のデビュー作。

チゴズィエ・オビオマ『An Orchestra of Minorities』（栗飯原文子訳）

ナイジェリアの貧しい農夫が落ちた運命的な恋の顛末が、彼の守護精霊により語られる。著者は『ぼくらが漁師だったころ』に続き、二作連続でブッカー賞最終候補となった。

6月以降

デイヴィッド・ミッチェル『ボーン・クロックス』（上下）（北川依子訳）

15歳のホリーは年上の彼氏と駆け落ちした先で超常現象に遭遇し、大きな

早川書房

戦いに巻き込まれる。世界幻想文学大賞受賞。

アンナ・シャーマン『Bells of Old Tokyo』（吉井智津訳）

かつて東京には時を告げる鐘がいくつもあった。イギリスの作家が東京中の遺跡をおとずれ、江戸から令和まで積み重なった土地の記憶を掘り起こす。

アン・カトリーネ・ボーマン『アガータ』（木村由利子訳）

年老いて廃業を考えるようになった精神科医と、女性患者アガータの友情を描く。デンマーク発の静謐な物語。

Elif Shafak『10 Minutes 38 Seconds in this Strange World』（北田絵里子訳）

トルコ、イスタンブールの路地裏のゴミ箱で、何者かに殺害され、人生の幕を閉じた娼婦。これは、彼女が死へと向かう過程に起こった、10分38秒間の意識の走馬燈を描く物語。2019年ブッカー賞ショートリストノミネート作品。

劉慈欣『三体Ⅱ 黑暗森林』（大森望ほか訳）

発売即10万部となった衝撃作、劉慈欣『三体』待望の第二部が初夏刊行予定です。人類文明最後の希望となる「面壁者」とはいったい何者なのか？ まずは加速するエンタテインメントをお見逃しなく！

ヴィルジニー・デバント『Vernon Subutex1』（博多かおる訳）

かつてパリにその悪名をとどろかせたレコード屋ヴェルノンは、今や失業して路上生活の身。彼がパリ社会の底辺で出会うのは……パリ現代社会の問題点を鋭く突く。

ロバート・マクファーレン『Underland』（岩崎晋也訳）

古代人が絵を描いた洞窟。大都市の地下迷宮。溶けつつある氷河の洞穴。放射性廃棄物の墓場……。人間にとって地下とは何なのか。世界各地の地下世界を探訪し思索するノンフィクション。

コルソン・ホワイトヘッド『The Nickel Boys』（藤井光訳）

1960年代フロリダ。矯正施設に送られた二人の黒人少年は、想像を絶する虐待を目にする。『地下鉄道』のコルソン・ホワイトヘッドが実在した学校をモデルに著した最新作。

マーガレット・アトウッド『The Testaments』（齋藤英治訳）

ロブ・ハート『The Warehouse』（関美和訳）

欲しいものは何でも揃った通販サイトの倉庫。そこで暮らすのはどんな気分か？ 「ビッグブラザー」となったアマゾンを描くディストピア小説。

キャスリーン・デイヴィス『The Silk Road』

どこかとても寒い北方の迷宮。ジー・ムーンの指導のもと、ヨガのレッスンが行われている。誰かが「死体のポーズ」をとったまま目覚めなかったとき、天文学者、記録官、植物学者、保管者、地政学者、地理学者、雪男、そして料理人は、それぞれがその迷宮までやってきた道筋を思い出す——生と死、存在と非在をめぐる思索的な小説。

ジュリア・フィリップス『Disappearing Earth』（井上里訳）

カムチャツカ半島の町に住む、幼い姉妹が誘拐された。少女たちは見つからず、犯人の手がかりもない。謎と悲しみとともに残された町の女性たちに寄り添う文芸作品。各紙誌ベストブック選出のデビュー長篇。

金宇澄『繁花』（浦元里花訳）

60年代に上海で少年期を過ごした阿宝・滬生・小毛の三人は、激動する中国でのそれぞれの人生、上海の変化を振り返っていく——百人もの市井の人々の暮らしが題名どおり“咲き乱れる花”のように描かれる、中国の大ベストセラー。ウォン・カーウァイ映画化。

早川書房

ジョン・ル・カレ 『Agent Running in the Field』 (加賀山卓朗訳)

47歳、スパイを引退することになっていたナットは、ロシアからの脅威の高まりを受けて、最後の仕事に従事することになるが……。御年88歳の巨匠ジョン・ル・カレの最新作。

Naomi Ishiguro 『Escape Routes』

カズオ・イシグロの娘による初短篇集。

Sally Rooney 『Conversations with Friends』

91年生まれながらすでにアイルランドを代表する作家としての地歩を固めつつある作家のデビュー長篇。第二作 Normal People も刊行予定。

藤原編集室

👑 今年のおススメ

A・ブラックウッド他『幽霊島 平井呈一怪談翻訳集成』（平井呈一訳）
創元推理文庫

『吸血鬼ドラキュラ』などの名訳・名解説で、多くの怪奇小説ファンを育ててきた斯界の第一人者、平井呈一（1902-76）の怪奇短篇翻訳を集成。ラヴクラフト、ブラックウッドからオスカー・ワイルドまで、全13篇。付録として、生田耕作とのゴシック小説対談、伝説の同人誌《THE HORROR》への寄稿、エッセー・書評を多数収録。

ジェイムズ・ブランチ・キャベル『イヴのことを少し』（垂野創一郎訳）国
書刊行会

赤毛の若者ジェラルドが先祖ドム・マニユエルの物語を執筆中、悪霊が現れ、お前の肉体に乗り移ってお前の現世を引き受けてやろうと言う。申し出を受け入れたジェラルドは銀の馬に跨り、あらゆる神の終着地アンタンに向かう。人生に対する深い洞察とユーモアに満ちた大人のためのファンタジイ《マニユエル伝》の一卷。

シャーロット・ブロンテ『ヴィレット』（上下）（青山誠子訳）白水Uブ
ックス

ラバスクール王国の首都ヴィレットへ辿り着いた身寄りのない英国女性ルーシー・スノウは、女子寄宿学校を経営するマダム・ベックに雇われ、英語教師としての生活を始める。運命に立ち向かう内気なヒロインの心理的陰影に富んだ語りの魅力で『ジェイン・エア』以上の傑作と称される、シャーロット・ブロンテの文学的到達点。

藤原編集室

👑 来年の隠し玉

◆ 白水社

《エクス・リブリス・クラシックス》

イーヴリン・ウォー『もののふども』(仮) (小山太一訳)

名家出身の中年男ガイ・クラウチバックが第二次世界大戦の勃発に今こそ「大義」に身を捧げる時と陸軍に志願入隊、やがて戦場に赴くが……。ウォーが自身の戦争体験をもとに書き上げた《誉れの剣》三部作の第1巻。「第二次大戦が生んだ最も優れた英国小説」と評される名作、全3巻刊行開始。本邦初訳。

《白水Uボックス／海外小説 永遠の本棚》

ナターリヤ・ソコロワ『旅に出る時はほえみを』(草鹿外吉訳)

合金の骨格に緑色の人工血液、生肉を動力源とする鉄製の怪獣17Pは、鑿岩機で地中を進み、拙いながら人間のことも話した。怪獣創造者の《人間》は自ら怪獣に乗りこみ、地下潜行試験を繰り返していた。一方、市内で発生したストライキを武力鎮圧した国家総統は独裁体制を推し進めていく。「旅に出る時はほえみを……」金属製の怪獣の歌う声が心に響く、現代のおとぎ話。

イタロ・カルヴィーノ『まっぶたつの子爵』(村松真理子訳)

トルコとの戦争へ出かけたメダルド子爵は、敵の砲弾で体をまっぶたつに引き裂かれ、右半分だけの体で領地に帰ってくるが……。《我々の祖先》三部作について作者自ら語った序文を併録(本邦初訳)。[翻訳権取得]

◆ 国書刊行会

R・オースティン・フリーマン『ソーンダイク博士短篇全集 I 歌う骨』(仮)
(湧上瘦平訳)

当時最新の科学を犯罪捜査に導入、シャーロック・ホームズ最大のライヴァルとして人気を博した名探偵ソーンダイク博士シリーズの中短篇42作品を全3巻に集成。初出誌、単行本から挿絵、図版を採録した決定版全集。第1巻は第一短篇集『ジョン・ソーンダイクの事件記録』と倒叙推理の先駆『歌う骨』の2冊を収録。

『エラリー・クイーン 創作の秘密 往復書簡 1947-1950』（仮）（ジョゼフ・グッドリッチ編／飯城勇三訳）

本格ミステリの巨匠エラリー・クイーンは、フレデリック・ダネイ、マンフレッド・リーという従兄弟同士の合作作家。プロット担当のダネイと小説化担当のリーは、毎回、手紙と電話で激しい議論を戦わせた。中期の傑作『十日間の不思議』『九尾の猫』『悪の起源』をめぐる、二つの異なるタイプの才能が細部の検討を重ね、時に火花を散らして闘う様をまざまざと見せる往復書簡集。ミステリ創作の内幕を明らかにした貴重なドキュメント。

コリン・ディッキー『ゴーストランド 幽霊のいるアメリカ史』（仮）（熊井ひろ美訳）

アメリカ各地に残る幽霊話は、この国が忘れようとしてきた過去、見捨てられた存在を闇の中から呼び起こす。先住民、魔女狩り、奴隷制度、銃と暴力、人種差別、女性虐待、精神病患者、社会の落伍者——幽霊たちがかきたてる恐怖の背後には、アメリカという国が抱える根源的な不安がひそんでいる。全米の有名な幽霊スポットを興味深いエピソードをまじえて紹介しながら、「幽霊の国アメリカ」の深層を描いて話題を呼んだノンフィクション。